

令和7年度 長野県立歴史館協議会 議事録

1 日 時

令和7年7月23日（水） 午前10時から正午まで

2 場 所

長野県立歴史館 第一研修室

3 出席者

(1) 委員（五十音順）

植田 平 委員 浮貝 貴子 委員 久留島 浩 委員 酒井 賢一 委員
中澤 聖子 委員 野口 舞子 委員 福島 正樹 委員 矢島 宏雄 委員
山本 直佳 委員 若林 直美 委員

(2) 長野県立歴史館

特別館長 笹本 正治 館長兼管理部長 小松 健一
副館長兼学芸部長 新津 尚治 総合情報課長 水澤 教子
考古資料課長 櫻井 秀雄 文献史料課長 村石 正行
管理部副参事兼課長補佐 井上 智

(3) 長野県県民文化部文化振興課

文化財・県史編さん担当課長 田中 洋 文化財係長 赤津 英雄
主事 石原 みなみ

4 議題等

- (1) 会長及び副会長選任
- (2) 県立歴史館の事業概要について
- (3) 意見交換

5 内 容

(小松館長)

ただいまから令和7年度長野県立歴史館協議会を開催いたします。この歴史館協議会は、博物館法第23条の規定により、博物館の運営に関し、館長の諮問に応ずるとともに、館長に対して意見を述べる機関です。

本日は特に諮問事項というものはございませんが、県立歴史館の事業概要についてご説明を申し上げ、①県立歴史館の機能充実および県民に親しまれる歴史館を目指し

て、②災害時における対応についての2点について、委員の皆様からご意見をいただきたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

この協議会は、長野県立歴史館管理規則第4条第3項の規定により、委員の過半数の出席をもって開会することができることとされております。

本日は10名の委員全員の皆様のご出席をいただいておりますので会議が成立していることをご報告申し上げます。次に笹本特別館長からご挨拶を申し上げます。

(笹本特別館長)

皆さま本当に暑い中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

今、各地で夏祭りが盛んに行われております。過日、私は大阪万博へ行ってきました。別に大阪万博に興味があるのではなくて、南信州伝統芸能継承推進委員会が中心になりまして、南信州の伝統芸能を大阪万博で披露したのを見届けに行ってきたんですが、県から部長課長等も参加していただき、改めて文化に対する再認識が始まっているように思いました。

実は一昨日、その前と飯山市で国指定の重要無形文化財の柱松柴燈神事（はしらまつさいとうしんじ）が行われました。もう本当に炎天下の中を上へ下へと何度も往復しながらお祭りをやってきたのですが、そこには副知事もきていただきました。だいぶ文化に対する認識が変わりつつあるなと感じました。県議会で、この地域から選出された竹内議員から、歴史館についての質問もあったりして、県全体としても歴史館が話題になりつつあります。私達としても歴史館の未来に向けて今後いろんなことを考え、一歩でも前進していかなければいけない時期に来ております。

皆様からは、私どもに少しでもいろんなことを教えていただき、この長野県立歴史館が県民にとって本当に必要な博物館、そして文化を維持し、文化財をきちんと守っていけるような拠点館になっていくためには、まだまだここが足りないとか、ここはもっと伸ばしてくれとかいうようなご意見を賜って、私達の運営に生かしていければと思っております。

本日は大変暑い中ではありますが、さらに熱い議論ができることを期待しております。本日もよろしくお願いいたします。

(小松館長)

本日は、当館を所管します長野県県民文化部文化振興課の田中文化財・県史編さん担当課長が出席しておりますので、ご挨拶を申し上げます。

(田中文化財・県史編さん担当課長)

皆さんおはようございます。県民文化部の田中と申します。よろしくお願いいたします。

本日は非常に暑い中、またお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。また日頃は長野県の文化財行政にご理解ご協力を賜りまして重ねて感謝申し上げます。

この県立歴史館は、歴史学習の拠点として、平成6年に開館して31年経つわけですが、この間、約300万人の方々にご利用いただいております。

来年は、この今の長野県の形で長野県になりまして150年の節目の年、また、戦後現代史を中心とした県史の編纂を始める予定としている記念の年になってまいります。

これから、この長野県を振り返っていくということが非常に多くなっていくわけですが、このような中で、この県立歴史館の果たす役割というのは非常に重要なものになると私どもは考えております。

一方で、開館から30年を経過して、施設や設備の老朽化、また収蔵スペースの不足、常設展示につきましては、なかなか大規模なリニューアルができていないというようなことなど、課題が山積しているというのも事実かと考えております。

今年度は、委員の改選がされて新しい方もいらっしゃると思いますが、これからのこの歴史館のあり方につきまして、今日は忌憚のないご意見をいただけたらと考えております。よろしくお願いいたします。

(小松館長)

今回は委員改選後初の会議となります。皆様の任期は令和7年の4月1日から令和9年の3月31日までの2年間でございます。

初めに委員の皆様から自己紹介をいただきたいと思っております。名簿順に植田委員の方からご挨拶をお願いしたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

[各委員の自己紹介]

(植田委員)

座ったままで失礼させていただきます。一般公募で参加させていただきました植田平と申します。飯山市在住です。普段は民間企業の事務員をしております。よろしくお願いいたします。

(浮貝委員)

同じく公募で参加させていただいています、浮貝貴子と申します。現在居住は坂城町なんです、地元が千曲市で、こちらの開館当時もあの小学生で来館させていただいて、その後もお世話になっております。よろしくお願いいたします。

(久留島委員)

久留島浩と申します。国立の歴史民俗博物館をもう 7 年ぐらい前に退職しまして、今、あんまり名誉っていう名前はふさわしくありませんけども、名誉教授ということになっています。

元々近世史、とくに幕領を研究してきたので、隣の山梨県までは来たんですけども、長野にも幕府の領地があるにもかかわらず、なかなか長野に調査に来ることがなくて、お恥ずかしいのですが、昨日、初めて中野までですね、車で回って見てまいりました。

博物館に 20 年ぐらいおりましたので、博物館の観点から何か意見を申し上げることができればと思っています。よろしく願いいたします。

(酒井委員)

隣の千曲市森將軍塚古墳館の館長をしています、酒井賢一と申します。よろしく願いします。

私は元々教員でございまして、退職して森將軍塚古墳館で今 3 年目を迎えています。教員生活の中では県の総合教育センターに勤務して、学びの改革に関わりました。今も学びについてこだわりながら、古墳館でも様々なイベント等で学びの改革を仕掛けております。

今日はよろしく願いします。

(中澤委員)

認定 NPO 法人エリアネットの中澤聖子と申します。よろしく願いします。

私はこの近くの千曲市市民交流センターを市から委託を受けまして、指定管理者ということで管理させていただいています。私も千曲市出身です。どうぞよろしく願いいたします。

(野口委員)

信州大学教育学部の野口舞子と申します。よろしく願いいたします。

私は教育学部で社会科教員になる学生を指導しておりまして、私の専門は世界史になるんですけども、学生と教員これから教員になる学生とですね、博物館利用というのは非常に大きなテーマになっておりますので、そういった点からも勉強させていただきたいと思います。本日はよろしく願いいたします。

(福島委員)

福島正樹と申します。歴史館は私の古巣でして、県に入って文化財関係の仕事をずっとやってまして、退職まで。あとプラスアルファ 2 年再雇用ということで仕事をしました。今は信州大学で大学史というところで大学の資料大学資料のアーカイブの仕

事はもうすぐ10年ぐらい、ずいぶんと長くやってるんですが。

委員としてふさわしいかどうかわかりませんが、裏まで全部知ってますんで。そういう意味では、少し辛口の話もしたりしようかなというふうに思っています。よろしくをお願いします。

(矢島委員)

長野県考古学会から出ております。矢島宏雄と申します。よろしくお願いいたします。

私は歴史館のすぐ近所に住んでおりまして、ずっと森將軍塚古墳の調査などをさせていただいていました。

新しい県史については懇談会メンバーということで、意見を申し上げたんですけど、新しい素晴らしい県史ができれば良いなというふうに考えております。

(山本委員)

私、治田小学校校長の山本直佳と申します。

つい1時間ほど前に終業式を行いました。そこで、1年生と6年生の発表があったんですが、6年生はこちらに社会見学にこさせていただいたのが一番思い出に残っていると話してくれました。

私は子供たちがこちらで学ばせていただいている、そこからの何かお話ができればなと思っております。どうぞよろしくお願いします。

(若林委員)

こんにちは千曲市教育委員の若林直美と申します。

いろいろお勉強させていただきたく、この席に伺いさせていただきます。

(小松館長)

ありがとうございました。それではこれより会議事項に入りたいと思います。始めに会長、副会長の選任をお願いしたいと思います。

本協議会は歴史館協議会運営細則第2条第1項および第2項の規定により、会長及び副会長を置き、また、委員が互選することとなっております。お伺いさせていただきますが、この取り扱いについてはいかががいたしましょうか？

(特に発言なし)

特にご意見がないようであれば、事務局案をお出ししたいと思いますけれども、よろしいでしょうか？

(了承の声)

それでは事務局案をお願いします。

(新津副館長)

事務局案といたしまして、会長を長野県考古学会会長の矢島委員に、それから副会長を信濃史学会会長の福島委員にお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか？

(小松館長)

ただいまの事務局案につきましてご意見等はございますでしょうか？

(異議なしの声)

異議がないというお声をいただきましたので、会長を矢島委員に、副会長を福島委員にお願いしたいと存じます。

運営細則第3条第1項の規定によりまして、会議の議長は会長が務めることとなっております。矢島会長は議長席の方へお移りください。

最初にご挨拶をいただきまして会議の進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いたします。

(矢島会長)

一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

今日の特別館長からのお話の中でも、県民にとって本当に必要な歴史館になるために皆さんの声をお聞きしたいということですから、それぞれのお立場で本当に歴史館がより良くなるために、辛口のことでも些細なことでも、忌憚なく発言して、それが実現できるか実現できないかは次の問題なんですけど、とにかくそれぞれの立場の意見をお聞きしたいということですから、意見をいただくようお願いしたいとそんなことを申し上げて挨拶といたします。よろしくお願いたします。

それでは会議次第に沿って議事を進めてまいります。限られた時間の中で有意義な会議となりますよう、円滑な議事進行に皆様のご協力をお願いします。

はじめに、県立歴史館の事業概要について事務局から説明願います。

(小松館長)

(資料1、資料2及び参考資料1について説明)

(矢島議長)

それでは、ただいまの説明についてご質問、また意見がありましたら、お願いたします。

(福島委員)

須坂収蔵庫の場所についてですが、歴史館は長野県の北に位置しています。その機能の及ぶ範囲をなるべく広げていこうといったときに、県内にどのように機能を分散させていくのかという観点も大事だと思っています。端的に言うと、また北信っていうイメージをすごく強く受けました。

先ほどの評価で言うと、地域との繋がりとか地域への広がりとか、そういうところがC評価なんですよ。歴史館が、どのように地域との関係を作っていくのかを考えたときに、須坂に設置したのは、いろんな事情があるのだと思うのだけど、今後ともそういう視点を忘れて欲しくないと思います。

例えば伊那とかだと、向こうから来るのも大変だけどこちらから行くのも当然大変なわけですよ。だから、限界があることはわかりますが、その辺をどういうふうにお考えなのかを伺いたいと思います。

(村石文献史料課長)

現在、須坂の収蔵庫は、1万8000点ほどの収蔵スペースを確保させていただいています。

ここは、当初から一般利用を目的としたスペースではなく、当館の収蔵スペースの狭隘化に伴う施設の拡充、行政文書書庫の空きスペースの拡充ということで設置したものです。

そのため、本当ならばこの館から一番近いところに設置できればいいわけですが、県有施設の活用ということで須坂に設置した経緯がございます。

新たに閲覧対応のできるようなスペース等をとということになりますと、歴史館の公文書館としての機能の問題とも関連してきますので、福島委員がおっしゃられたとおり、全体的な視点で検討していくということだと思いますが、現状では館の空きスペースの問題ということになっております。

(矢島議長)

他にございますか？

(久留島委員)

このようにきちっとした自己評価目標を中期・長期目標として作り、年度ごとに自己評価するということはすごく重要なことで、これを見れば大体この館の活動がよくわかるんですけども、CとかDとかになっているところの原因をどう自己評価するかというのが、自己評価の一番重要なところで、備考欄のところに、なぜ駄目だったのかということをも明記していく必要があるのかなと思います。

なぜ駄目だったのかについて、単に予算の問題なのか人員の問題なのかも含めて掘り下げて評価をしていただいた方が、将来につながるのかなというのが一点目のござ

います。

それから二点目は、これは次のところでもう一度議論になるのかもしれませんが、職員の方の内訳のところ、文化財の保全に関する専門の職員がどのくらいいらっしゃるって、あるいはデジタル化をするときの、デジタル化はおそらく職員の方がみんなで手分けしてやってるのだとは思いますが、専門的技術を持った職員はどのくらいいらっしゃるのかなというふうに思っています、そのあたりをお聞きしたいんですが。

(新津副館長)

ご指摘受けましたC、あるいはDっていうところの深掘りは、やはり記録として残していかなければならないと思いますので、そのところは備考欄で、今後、記載してまいりたいと思います。

(小松館長)

デジタル化の関係の専門職員の配置に関してですが、私どもの館の職員の現在の構成を考えたとき、デジタル化事業の専門職員は当館にはいない状況です。学芸員も考古を専門とする職員が中心な中で、デジタル化をどう進めていくのかというのは、課題です。

県組織の中には、デジタル化について相談できる部署もありますので、まずは館の中でどういうデジタル化をしていくのかという検討を行い、機器構成などを検討する段階になったところで、専門の部署等から助言をいただくような形で進めていければと思っております。

(久留島委員)

私のところもデジタル化を進めていこうと思って長年やってきたんですけども、やっぱりデータがバラバラになってしまう、互換性や継続性、使いやすさという点でもなかなかうまくいかないのです。まちまちになってしまう。自前でやると、専門性を保証できなくて結局長持ちしない計画になりがちじゃないかなというのが、この間の経験です。最近人文情報学はかなり進展してるんですけども、まだその専門家が博物館に所属しているという状態ではまだありません。

でも、そのところをきちっとやっていかないと結局バラバラに作ってしまったりバラバラになってしまうという可能性が出てくるので、例えば、長野県全体でどういう計画を立てて、どういう人材を必要としているのかということを考えていただく中で、歴史館にもきちんと配属していただくというのがいいんじゃないかなと思います。結果的に機器も含めて無駄になってしまいがちだというのが、どうも今の日本のデジタル化のありようだと思うんですね。私の失敗の経験から考えても、ぜひその辺を伺い

たいと思います。

(笹本特別館長)

MLA連携は非常に進んでおりまして、特にデジタル化に関しては、長野県立図書館を中心にやっています。

ただし、今、久留島さんからも話があった通り、例えば長野県立歴史館の中にきちんとしたデジタルデータを扱える人がいるかということになりますと、ここの職員は埋蔵文化財センターと学校の先生たちの混合チームであって、きちんとした学芸員採用でやっているわけではないこともありまして、対応できる人員がおりません。

一方で、博物館法が変わってから、観光とかデジタル化がすごく求められるのですが、職員数は増えてない。予算もついていない。お題目としてやりなさいって言うことは言っても、我々のところに補償がないんですよ。

過去から続く必須の仕事の中でアップアップになっていて、補助金等が取れたものについては、デジタル化がある程度進むけれども、それ以外について内部ではなかなか思うようにいかないというのが実情です。

ですから、今のご意見を前提にしながら長野県全体でやっぱり管理していく形を考えなきゃいけません。これはMLA連携を含めてですね、長野県全体としてはどうしていくんですか、図書館があれだけやっているんだったら、私達もその中に入ればいいのかって、申し上げているんですけど、なかなかまだ結実しておりません。只今のご意見を参考にしながら、本県としても前に進むように持っていきたいと思います。どうもありがとうございました。

(矢島議長)

他にはいかがですか。

(植田委員)

資料2のところと参考資料1に関してのところ2点あります。

まず、今後の課題というところ、資料2のところ、これはこの後の資料3のリニューアル案のところにも関わってくるのですが、やはり久留島先生がおっしゃったように、人材という課題が大きく、これ建物のこととか物のことの課題は書いてあるけれども、人事(ヒトゴト)、カネゴトの課題が書けないのでしょうか。

答えづらい部分はいいのですが、歴史学、考古学もしくは地理学、それから人文情報学、デジタル化、それから発信する人ですよ。

メディアリテラシーを持ってらっしゃる方などなどそういった部分、非常勤の方、ボランティアの方に頼っているという現状を見て取れるので、ただ課題として、解決を求めるということではなく、課題として意識し続けないと駄目だと思いますので、

そういったところ回答は求めませんが意見として申し述べます。

それから参考資料1のところです。

評価のところでは気になるのが、数値化できない実績。例えば研究を進めていただいて、どれだけ新たな知見や方向性を指し示してくださっているのかというところもすごく重要なところですよ。

これはただ数値目標ではないので、あれなんですけれども、例えば図録を、今回安曇野展のものを作っていただいています、すごく見栄えはいいものだし、参考にさせていただきます。

ただ、これ、さっき展示を見て図録見て、安曇野って結局何なのかというのが新たなものが伝わってこない、何かきれいなものを作ってくれたなっていうところで、批判というわけではなくて、そういったところの数値化できないものに対する評価というのが、後手後手になっていくという視点で、今後もそういう意味では課題などそういったところに箇条書きでもいいから載せていただけないものかと考えております。これも回答は求めません。以上意見でした。

(野口委員)

先ほどのデジタルアーカイブ化の話に戻ってしまうのですが、私も、歴史学で今、人文情報学がすごく研究が進んでいるというところに身を置いている人間なんです、ただ、デジタルアーカイブってすごくお金がかかって手間もかかって整えることはすごく力を入れるんですけど、活用に全然結びつかないんですね。

私も関わった考古学のデジタル化が結局ポシャって、全部整えたのに1年くらいで公開をやめたっていう経験などもあったりして、やはり何が求められていてどういうことだったら活用できるのかみたいなことまで考えてやっていただかないと、作っただけで終わってしまうと思うので、やはり教育とか普及の部分を重点的に考えていただいて、それから設計していくっていう方が、あり方としてはいいのかなというふうに考えております。

(小松館長)

デジタルアーカイブ化についての課題ということで、実際に関わられた例を挙げてご指摘をいただきました。おっしゃる通りだなというふうに思います。

今後どういう形で進めていくのがいいのかっていうところが、現段階でまだしっかり固まってはいませんけれども、おっしゃられるように教育普及というものをまず重点に考えて、作ったけれどもあまり使われないという状況は問題であり、残念な結果になってしまうと思いますので、今ご指摘をいただいたことを頭に入れながら、今後こういったデジタル化を行っていくのか検討してまいりたいと思います。どうもありがとうございました。

(山本委員)

一気に具体的な柔らかい話になってしまうかもしれませんが、私、今日の終業式での子供たちの発表を聞いていても思ったんですが、やっぱり子供のときに興味を持つってというのが、その後の施設の有効活用にもつながっていくでしょうし、これから先の子供たちの歴史への学びの深まりを支えるものになるんじゃないかなと思っていますが、先生方のお声も聞いてみました。

そしたらやっぱり体験的なものがあると子供たちにはとって深く入ると、今日、実際子供の発表を聞いてみると、あの重さを持って比べられる展示が子供たちには大好評だったそうなんです。ですので、ああいう体験的なものを施設の中にたくさん取り入れていただくと、子供たちの学びの意欲にもつながったり、心に残る見学になるんじゃないかということでした。

あと、お出かけ歴史館、年3回とあったんですが、これはどちらの小学校に行かれてるのかなと思ったんですが、本校にもぜひ歴史館の職員の方に学校に来てもらって、子供たちが興味を持てるような工作ですとか、体験活動をさせてもらえると、またここに来てその方に話を聞いてみたりとか、それに関わる展示を見てみたいとか、そういうものにつながっていくんじゃないかと、広く地元の小学校にもぜひまた足を運んでいただくと、ここに頻繁に子供たちも親御さんと一緒に来るようになるんじゃないかなと思います。

ホームページの話も出ました。クイズコーナーですとかパズルコーナーですとか、そこはもう子供たちとともに楽しんで見させてもらったんだけど、その展示について、その企画が変わったりしたときに、SNSのようなもので生の声が配信されると、子供たちも興味を持って見るんじゃないかなと、先ほど発信というお話がありました。そんな、今の子供たち、若い人たちにもキャッチできるような、そんな配信があるといいんじゃないかなということでした。

最後になります。バックヤードの見学もとても子供たちも職員も興味を持っておりますが、入れる人数が限られているということで、小規模校の子供たちのみ可能な現状だということなんです。ぜひ広く、子供たちが表に見えているものじゃない、裏の、職員の方たちの取り組みが見える、違う視点を持って博物館を見れる、そんな取り組みも何か工夫をいただければという声がありました。要望ばかりで申し訳ありませんが、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(水澤総合情報課長)

今、千両箱を持ち上げる体験などは継続していますが、今まであった体験が少し減ってしまったということで、体験を復活させなければいけないと思ひているところな

のですが、先ほどの DX 化にも関連しまして、昨年度から当館に DX チームが立ち上がりまして、館全体の DX 化の中で、子供さん方へのサービスも向上させていきたいと思っております。

先ほど笹本特別館長も言いましたように限られた人材で、学芸員と教員の連合部隊の中で、各課で 1 人から 2 人ずつ人材をプールしまして、将来の構想に向けて取り組みをしているところです。

DX 化といいますのはまず資料ですね、当館の大量の資料のデータベース化、そしてその中から画像も入れて長期保存することを目指すというのが一つ目の取り組みでございます。これは歴史情報システムを 5 年に一度ずつ更新するのですが、ちょうど今年度が更新するタイミングになってきておりますので新たにクラウド移行して、さらにそれをお客様に発信できるように、取り組みを進めているところです。

総合情報課ではレプリカなど複製品を中心に、文献史料課は古文書の目録を今既に公開していますが、それをさらに増やしています。

考古資料課では県宝や重要文化財を中心にデジタル化して、その情報を公開できるようにするというところを目指しております。これがまず今年度の当館での第 1 番目の資料の基礎的なアーカイブ化の取組となります。

さらにそれをネットを通じて公開するにあたって、近隣の方でだけではなくて、県全域の方がアクセスできるように進めていく。ここは当然当館のですね、力量ではできませんので、いろんな業者さんを入れながら、いろんなプランニングをお聞きしながら連携しながらやっていくという、これが 2 番目のステップになります。

そして 3 番目のステップはデジタル化資料全てではありませんけれどもその中一部について、こちらにご来館いただけるお子様方の学習教材を作っていこうと考えています。

クイズとかワークシートを持って当館を学んでいただいているんですけど、これをタブレットにして、あるいは来館者の方はスマホで見られるような形にして、クイズあるいは一つの資料を見た際に、その背景が閲覧できる形にしていきます。例えばそれが出土した背景、あるいはそれを当館が保存処理する様子、そして資料をぐるっとひっくり返してみたり上から見たり下から見たり、それを子供さん方が 1 人 1 人でできるような、そんなところを究極の到達点にしようと取り組んでいます。

さらにその中の一部が外部の方の、外部というのは多分木曽地域とか飯田地域とかそういう遠くの学校さんでも見ていただけるようにあるいはおでかけ歴史館に行く際に、子どもがそのコンテンツを持って出かけてですね、見ていただけるようにそんなところも目指していきたいと思っております。

バックヤードには今まではずっと入っていただいていたんですが、資料の保存の面で難しいことがあります。であればバックヤードの情報をできる限りタブレットで展示室に來られたお子様方に見ていただけるようにしていければと考えています。

DX チームの活動についてはいろいろなところのご意見をいただきながら進めていただければいけないと思うんですが、やはり幅広く資料を閲覧していただき、そして興味を持っていただき、また個別にどこかにポイントを見つけて、お子様方に学習していただけるように、そんなことを目指そうと考えているところです。

(笹本特別館長)

私に来てからお出かけ歴史館というのを始めたのですが、それは、長野県立歴史館においでになる子どもたちは、東北信の住民の方が中心で、中南信の方は非常に少ない。まず交通費がかかりますし、学校の規模等もあって、なかなか来てもらえない。だったら出かけて行って、歴史館を活用してもらおうということで、木曾とか下伊那を中心にやっています。ですから、全県に対してサービスができていないわけでは

ありません。これは先ほどの人数を見ていただければわかりますように、私どもの職員の数はごく限られています。その中でも、実は学校から訪問していただく時期は、ほぼ同じ時期になってしまいます。ですからそのときにそれぞれの学校にどのくらいの時間が取れるかということと、学校側の状況によって対応の仕方が違ってまいります。対応の仕方もそれぞれに、例えば、できるだけゆっくり見ていただく方がいいとか、全体を見ていただく方がいいとか、それぞれの対応を考えながら現状では行っています。

ですから、大変申し訳ないのですが、全ての皆様に対しては、人数とお金の問題があってできないですが、県立ですから、こちらに来にくいところに対するサービスはできるだけ細かくやっつけようとして努めています。

それからバックヤード見学ですが、あれは大変人気がありまして、非常に私どもとしても頑張っけてやってきました。しかし、虫害やカビが発生しました。虫害その他のことをどのように考えていくか、私達にとって一番大事なものは、資料の保存であって、収集・保存・研究・展示という順番があるだろうと思っていますので、資料をいい状態で次の時代に伝えるために、バックヤード見学は取りやめにしました。

そのためには、今日も職員研修会で虫のことをみんなで学んでいくんですけども、多くの方を入れることによって温湿度管理あるいは虫害等の問題も発生して来るといことで、現状のようになってきたということをご理解いただけたらと思います。

(矢島議長)

ありがとうございました。

他には、これまでの説明のところはよろしいでしょうか。

(福島委員)

展示のリニューアルについて伺いたいんですが、大変なことだと思うんです。常設

展ですね。ずっと 30 年間変わってないっていうのも、私がいたときもなかなか出来なかったんですけども、一番大事なのは一つは環境復元展示っていうスタンスで、体感展示っていうのを基本に、当時江戸博とかですね、東京都の下町の博物館とかそういうところでトータルメディアっていう会社を中心にあって、そういう実験的な試みをするのに長野県としても乗って、実験的にやったことだから、一つは総括が必要じゃないかという気がします。

そういう実験的にやった体感展示っていうものがプラスマイナス両方の面はあると思うんですけど、それがもし何らかの形で現時点で成果を見せつつあるというか、一定の方向性が出てきているのなら教えていただきたいし、まだだということになれば、いくつか問題もあるわけですよ。史実と違うことを作っていますんで、何でもわかって知ってますから、当然ここが違うことは違うっていっぱいあるわけですね。

例えば善光寺の門前の復元にしても、最近はあるあいう景観が本当に小さかったかどうかっていうことについてもいろいろ疑問が出されて、それについての一定の見解をやっぱり示さないと、引き続きこの展示をするにしても、県民に対して説明責任っていうのを、学問上の説明責任っていうのはやっぱり果たせないということになるんじゃないかなということで、そういった展示の内在的な評価といいますか、そういうものを含めて、どういう状態であるのかっていうことを伺っておきたいなと思います。

(矢島議長)

リニューアルの案については、次の意見交換で行いますので。

(福島委員)

ではそこで。

(矢島議長)

次の意見交換のテーマについて説明をお願いしていきたいと思います。

【意見交換 テーマ① 機能充実及び県民に親しまれる歴史館】

(小松館長)

ただいま各委員さんの方から様々なご提案をいただきましてありがとうございます。

先ほどのバックヤードの話とかですね、一定の制約もございまして、必ずしもできない部分もございまして、そういったニーズがあるということは大事なことだというふうに思いますので、そういうところに入らない形の中でどんなことができる

のかとか、そういったことはまた引き続き私どもの方で考えていかないといけないのかと思います。

また、先ほど植田委員の方からは、数値化できない実績についてどう考えるかとかという、人材についてのお話もございましたけれども、これも大事な観点だと思えますし、その部分については私ども今後、今も文化振興課等とも相談しながら進めているところもありますけど、そこは大事な部分だというふうに思っております。

いただいたご意見を今後の館運営の方へ生かしてまいりたいと思います。どうもありがとうございました。それでは次の意見交換の方の説明をさせていただきたいと思えます。

(資料3、資料4及び資料5について説明)

(矢島議長)

ありがとうございました。大きなテーマで三つ。資料の3、4、5とがございます。その中で、まだご発言されていない委員さんもいらっしゃいます。どこからでもいいですから、ぜひご意見をお願いいたします。質問でも結構です。最初に福島さん、先ほどの続きをされますか。

(福島委員)

繰り返しになってしまうかもしれませんが、やっぱり博物館の中心は常設展示なんですよね。

企画展はそれぞれ新しい角度から光を当てて、そのときそのときの関心と呼ぶという、それもとっても大事なことですし、効果的だと思います。日常的な活動のもう一つの側面っていうのは常設展示に現れると思うんですね。常設展示が魅力的なものとして多くの人に受け入れられるかという、いろいろ工夫して常設展示のコーナーを定期的に変えることも結構やったんですけど、大きな常設展示の風景の中のワンコーナーを変えるっていうのでは、なかなか景色変わらないんですよね。

だから、それはやる意味がないって言ってるわけじゃなくて、集客という面ではなかなか思ったほど効果が上げにくい。

新しい展示をやるための研究は進むんだけど、それをやったことで多くの人に関心を持って見てくれるかという、企画展ほどは効果が上がらないっていう感じが僕はしていたんですね。

どうやったら常設展示が魅力的になるか。これからのバーチャルの世界なんか考えると、ホームページでもバーチャル的な映像って見れますけど、もう少し今の技術は多分進んでるんで、中に入っているいろんなものを見れるように作れると思うんですね。

僕の個人的な意見としては、体感展示は、割合がどのぐらいかは別にして効果的な

ので、自分が中に入るのか、模型を見るようにしてそこにあるものを観察するのか、来ていただいた方にどちらの観点で見てもらおうかっていう判断だと思うんですね。

なので常設展示の、特に環境関連展示の学術的な成り立ちがどこまで今耐えられるのか、耐えられないのか、耐えられないんだったらもう、なるべく早く撤去して作り直さなくちゃいけない。その辺の評価から始まって、どんなことをお考えなのかっていうのをお聞きしたい。

(水澤総合情報課長)

全体の入館者数の令和6年度を見ていただくと、6万2000のうち2万9000が常設展示の入館者ということで、福島先生の方でかなり謙虚におっしゃっているんですが人気は続いているのではないかと考えています。

来館者アンケートを取って印象に残った展示は何かをお聞きすると、令和4年から6年の集計データでは、50、60%近くが環境復元展示、そして環境復元展示の7割程度がナウマンゾウで非常に人気を誇っています。続くのが、実物資料です。実物資料も土器を中心にもものすごく根強い人気があって、その次が8%程度になっている移築した住宅古民家です。

それを解析した当館DXチームでは、環境復元展示の人気は根強い反面で、実物資料もやはり当館の売りだということは忘れてはいけないという分析をしています。

先ほどのご質問に対しては、環境復元展示も学術的にこれはどうかというところは直していく。例えば建屋の住居の茅の切り方が、非常に垂直になってるとか、あと切り株がいかにも切ったように三角に止まってるとかそういうところはやはり今の学術的などで考えるべきです。あと高床式倉庫は、当館が建設された当時はまだ仮設だったんですが、今や北陸の遺跡なんかで坂家などで高屋敷倉庫を出土してますので、ちょっと上屋の形は違いますが、それ自体は問題ないと。そんなところを一つ一つ検証しながら、環境復元展示はある意味維持する。あれを撤去するとものすごく費用もかかってしまうということはあるんですがやはり精査しながら維持するという方法もあるかなと思っています。

それからもう一つが、資料をじっくり見てもらおう仕掛けをする。先ほど私もお話ししましたように、資料が出土した背景ですとか、保存する様子とか、そして360度様々なところから観察できる、あるいは拡大したり縮小したり、背景となる情報をコンテンツの中に入れておく。土器中にコクゾウムシが入ってるようなこともあるので、そのような特殊な虫眼鏡をかけて資料を見てもらおうような仕掛けも同時に行って、さらに当館の資料の魅力を引き出し、それを閲覧していただくようなものを作りたいと考えています。

バーチャルな空間もあってもいいかもしれないですし、建物の映像の中に光のシャワーの中に入って行ってそこで別の世界を見るような演出もあっていいかなと思います。

ます。他の博物館の事例などぜひいろいろなご意見をお寄せいただければありがたいです。

(矢島議長)

他にはいかがでしょうか。

(久留島委員)

根本的な質問ですけれども、リニューアルはどのような計画で、どのくらいの予算で何をしようとしているのか、あまりよくわからないので質問を控えていたんですけど、県の150周年ということもあるし、これだけ県のいろいろな計画の中に長野県立歴史館の役割が重要だと言われているわけだし、県知事もそういうふうに使われているわけですから、今がこれを実現するチャンスだと本当に思うんですね。

そのときにどのくらいの規模で何をするかによって、たとえばさきほど話題にでた環境復元展示をどうするかというのも大きな問題です。というのは、私のところも実は環境復元展示をやっていて、第1展示室のリニューアルをしたらですね、ナウマンゾウのところが評判がよいというのですね。「こけおどし」という表現はともかく、最初に見応えのある環境復元展示があるとインパクトは強いと思います。ただ、それがよいかどうかというのは非常に難しいところがあって、なぜかというとな回来た人はもう来ないんですね。1回驚いた人は二度とはこない。そのあたりがこの環境復元展示を含め常設展示の一番つらいところだということももう重々承知をされていて、うちも30年になるので、順次、総合展示のリニューアルを行おうとしています。この点は避けては通れない点ですね。来年度は、第5展示室という近代の展示のリニューアルします。その費用についてはちょっとここで言いませんけども、それでも相当な費用がかかります。費用対効果も含め、また常設展示とはどうあるべきか、という事とも関わって、予算の問題と「大きな目立つ」環境復元展示と常設展示との関係についてはよく考えていただきたいと思います。

近現代の展示については、近現代史ならではの非常に難しい問題が出てきますが、考古とかですね中世ぐらいまではですね、環境復元展示の方が実はわかりやすかったりするわけですね、来館者には。うちもアンケートを取ると、たしかにこれは壊せないっていうものもありました。

だけど、さきほど福島さんがおっしゃっているように、いっぺんそれを作っちゃうと、これはこれで壊せないこともたしかです。この「重さ」をどうするかっていうのはちょっと考えていただいた方がよいと思います。その辺りの計画がどのぐらいどういうふうに進んでいるのかがわからないので、ちょっと控えていたんですけども、あるいは現実的に言うと、予算やスペースの問題に制約されて、結局のところは使えるものは使っていくという形でしかやれないのかなあというふうな感想はもっていま

す。結果的に、環境復元展示についても人気のあるものだけを残すとかそういうことはあると思います。

むしろ問題は、やっぱりいつ来ても新しい発見や経験や何か学びがあるかという観点から常設展示の内容をどうするのかということではないかと思います。福島さんが考えておられたことかもしれませんが、常設展示の中に定期的にはちょっと何か新しいものを入れたり、新しいコーナーをつくって、そこに来た人が、何かちょっと新しいものがあるぞっていうふうに思ってもらえるかどうかという点が重要だと思います。私のところもそういう特集展示コーナーを各展示室にもうけているんですけども、それだけ見て帰る客も多くてですね、常設展示までもう一遍戻って見てくれる人は必ずいるわけじゃないんですね。それでも、常設展示にも何かいつも新しい発見がある、という点は、考えていただいた方がいいと思っています。

それからテーマ型か通史型かというのも、これもすごく難しい問題で、テーマ型にしちゃうと、やっぱり小・中学校の生徒さんにはなかなかわかりにくくなっちゃうんですね。私のところはテーマ型展示だと言いながら、実は部屋は通史的に分かれているわけですね。ですから、その時代を認識しながらテーマで考えてもらうということをやっているわけですが、今日歴史館の展示をちょっとだけ見せていただいたら、どうも通史型の展示のメリットもあるなと思いました。やっぱりわかりやすい。

ただ近世の展示が少なすぎるということはちょっと実感としてはありますけども、企画展示を見ていると、来館者はやっぱり魅力のあるのは考古と答えていますよね。それについて中世の武士団でしょうか。近世はどうもほとんど人気はないみたいですね。

近現代の展示は、これからますます重要になってくるというふうに思いますけども、通史の中にテーマ型をどう入れるかっていうのはなかなか難しく、これもひとたび固定してしまうとなかなか変更できないので、一つのアイディアは、福島さんがおっしゃっていたかもしれませんが、企画展示でやっていいパッケージができたならそれを通史展示のところでやっていけるようにするとか、あるいは歴史館で作った展示のうち、リニューアルでは使わないけれど利用価値のある部分をパッケージにして県内各館に巡回していくとかですね、そういう努力をすることによって、歴史館の常設展示の存在理由を高めることができるのではないかとこのように思いました。

最後に、収蔵スペースの問題は今よく考えて入れておかないと、新しいものを作るときに入れておかないと、あとからはもうどうしようもなくなってしまうわけですね。長期的に何がどの程度必要なのかということについてはもうお考えていただいていることだと思いますので、ひとこと付け足しますと、後で文化財保全活用のところから出てくるかもしれませんが、起こってはいけない自然災害が起こったときに一番重要な問題は緊急避難先の確保なんですね。一時避難先。それを長野県の歴史館がするのかどうかによってもまた全然違う。その辺りも含めてリニューアルの問題として考えていただければいいなと思っています。あとはここに書いてある通りで、課題

もその通りです。

(矢島議長)

今の件で何かコメントはありますか。

(小松館長)

大変参考になるご意見をいただきましてありがとうございます。

リニューアルの期間と予算のところですね、確かに書いてないんです。それはですね、実はこれから考えていかないといけないというところがありまして、現段階でどのぐらいの期間でどのぐらいの規模をかけてっていうところがなかなか書けないところがあります。ですので今日の時点では、様々な論点をいただいて、私たちの方でそれを踏まえてどうやって考えていくのかという方向性をこれからつけていきたいと思っておりますので、そのためのご意見をいただけるとありがたいと思っております。

展示のあり方についても、実際、環境復元型の展示を入れていく形がいいのか、映像を活用するという方法もありますので、それを見に来ただけで、また次回は来ていただけないような方がいるとするならば、映像主体型にする中で、機械は同じですけど、中身を変えていくことでまた来ていただくようにするというような考え方も多分あるんだろうなというふうに思っております。そういった選択肢も含めて、今後どういう形で展示内容をリニューアルしていけばいいのかというようなところを突っ込んで考えていきたいというのが現状でございます。

(矢島議長)

リニューアルに関して、私の方から一ついいですか。長野県の人権啓発センターは、最初は入っていなかったんですね。あれが急に田中知事の時に入ってきたんですけど、あれをもう一度考えて、出してしまうというようなことを考えて、あのスペースを使ったら結構なことができるから、何かそういうことも含めてリニューアルを考えていただければと思います。よろしくをお願いします。

他に、まだ発言されていない酒井委員さんはどうですか。

(酒井委員)

リニューアルでは、展示を変えるという考え方から少し抜けていく必要があると思うんですね。実は先週、ここにいらっしゃる水澤課長さんが若い頃、うちの職員が歴史館でお勤めしたときに、縄文の環境復元展示の前で演劇をやっているビデオを見せてもらったんですよ。それを見ながら思ったんですけど、結局展示が単なる展示で終わってしまっていて、そこで出来事が起こっていないという問題があるかなと。

今日も安曇野展を見せてもらったんだけど、仏像がたくさん並んでいるんだけど、見学者で仏像の前で手を合わせている人がいないんですよ。

もしかしたら仏像を単なる物としてしか見てなくて、そこに本当に祈りがあるのかっていう問題を感じました。今までの展示スペースっていう考え方から、環境復元された展示の中で、見学者たちも含めて企画者たちがそこで一つの出来事を作っていくってような考えでリニューアルできないかなと思うんですよ。

たとえば善光寺の復元の場所だったら、そこで瞑想する場所を作って瞑想してみる時間を作ったりとか、縄文の祈りをあげてみるとか、そのために当時の服装も準備しておいて、着てもらってやってもらうとか、何かそういうような体験スペースっていうか、展示プラスですね一つのステージを作っていったらどうか。そこに演劇人たちを加えたりとか、アーティストさんが入ってもらってそこで作品を作ってもらう。

「アーティスト in 博物館」みたいな感じで、そこで作品が作られていってそれが展示されるみたいなそういった発想が今、リニューアルに必要じゃないかなと。

実はこの5月に民話紀行というものをやっていて、森將軍塚を貸してくれていうので一緒に古墳に上がったんです。將軍塚の一番上のところで、来たお客さんたちに新作の民話を伝えるっていうようなことをやったら見え方もまた変わった。去年からの森將軍塚祭では初の試みで墳上にスカイステージを作って、そこでアーティストさんたちが自分たち思い思いに自分たちにとっての祈り、太古に対する祈りを捧げてもらうっていうようなことやったら非常に面白かったんですよ。

だから、今まで博物館に来られていないアーティストとか演劇人とかそういった人たちも巻き込みながら、リニューアルすることを考えていくことは面白いんじゃないかなと思います。

あともう一つですが、ホールがもったいないなとずっと私は思っていて、そこをうまく使えないか、そこをコンサートや演劇とかの催しに使ったときに、そこに来た人たちが博物館に来るつもりはなかったけど、ついでに寄って行くってような、何か直接的に博物館に足を運ばせるんじゃなくて、結果として足を運んでしまったってような仕組み作りで、ホールの活用をできないのかと思うんです。おそらく今、コロナ以降で音楽やりたい人たちはいっぱいいるので、発表の場に困っているんです。だからロビーでコンサートしませんかって声をかけると、古墳館の場合だったら無料で来てくれています。

そんな仕組み作りをしていけば、県民に展示を見ながら活用してもらえる。展示しているものが風景となって、自分たちの作品が歴史館で作られている、文化が作られる、歴史が作られる場所になっていった方が面白いんじゃないか。過去の歴史をなぞるだけじゃなくて、ここで新たな歴史が作られる、そんなスペースっていう形でリニューアルできればいいのではないかなということ私は森將軍塚古墳館を運営しながらいつも思っています。

(笹本特別館長)

先ほどの大前提ですが、実は予算規模その他全くまだわからなくて県会議員の質問に答えたレベルです。予算や県の動きによって全く動きが違ってきます。変な言い方ですけど、リニューアルでこの建物をいろいろ手を加えて、維持費に大きく経費がかかるなら、新しくした方が実際にお金がかからない場合もある。展示そのものに関してもどうやっていくかは、やはりお金の問題と常に関わりがありますので、今とっても悩んでいる最中です。福島さんが言われた件ですけれども、あれは今でもやっています。

それぞれのところでは展示品を変えながら、そのために委員会が作られて説明をしています。でも、全くお客さんは反応してない。お客さんは先ほどの通りナウマンゾウとか特定のところしか意識がないようです。現状で言うと、企画展がより多くのお客さんを集めているのですが、よその博物館から見たら非常に展示場が狭い。よそから見た場合ですけれども、今回仏像を入れて改めて思ったのは、企画展示室の天井が低い。したがって見たときのイメージが全く違う。

そういったような非常に多くの問題を抱えている中でどうしていくか。今ご提案があったことも、総合情報課、要するに全体を司る人たちの人数からすると、あれもやれこれもやれというのは、私は無理だと思っています。あれもやりたいこれもやりたいというのはいっぱいあっても、今やっていることですら、何か提案する度に時間が無い、人手が無いというのが職員たちの意識です。そういう中でリニューアルは今後しっかりその県内部で交渉して、お金がどこまで出るかによってやり方も違ってくると思っています。

職員たちの提案だけで本当にいいのか、限られたところでやるのか、プロたちもどこまで中に入れるのか、あるいは今日お集まりの先生方のご意見をどういうふうに汲み上げていくのか、やり方もその期間と資金によって、全く違ってくるだろうと思っています。その意味でまだ方向性は明らかではありませんが、今日お話されたようなことをきちんと課題として持っていくことによって、博物館の次があるだろうと考えていますので、さらにご意見を寄せていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

(水澤総合情報課長)

今のお話、ミュージカルを行ったのが今から20年前でございます。森將軍塚古墳がやはりあそこの古墳という場を使って、歴史を体験、体感してもらっているというのが素晴らしいと思ひまして、当館にもこんなに縄文の住居があるので、これを使って場として見ていただき、そしてそこで使っている資料ですね、そこでレプリカを用いてるんですが、ここに皆さん関心を寄せてもらって、もう一度展示を見

てもらいたいと、当館の資料をより良くより深く知ってもらいたいという意味でミュージカルを立ち上げました。

でも確かに練習の時間とか、全てが館の職員が作詞作曲編曲も行い、演技も全てあり歌も歌ったということで、非常に大変だったので、どういうふうに継承していくのかなというのが私の課題でした。今まで誰も後に続いてミュージカルをやろうという職員がいないので今のお話を元にもう一度映像なんかも、見て引き継いでいければなというふうに思っています。

もうちょっと縮小する形で何か場を盛り上げ、資料を引き立てていくような仕掛けができればいいなと思っております。

またご意見いただければと思います。

(野口委員)

博物館の「箱」の利用に関しては、官の方がやろうとするとどうしてもキャパオーバーだと思うので、外部の人や高校の演劇部とか、それは多分広く募ればやりたい人が出てくるんじゃないかと思うんですね。近くの小中学校とか高校に声をかけるだけでも、その子供たちがその場でやることによって関係者が来てくれるとか、歴史館の展示を見る気がなかったけど、見てくれるっていうのになると思うので、あえて関係ない人を入れることが多分大事になってくるんじゃないかと思いました。

あと、リニューアルがまだ予算規模とかが全然わからないということなので難しいところがあるんですが、現状の常設展示は私も拝見して、少々収蔵資料の展示が少ない、所蔵する数に対して展示が少なすぎるんじゃないかなと思って、やはり現物が持つ素晴らしさをアピールできていないんじゃないかというのをすごく感じて、それは先ほどのDXとも関わるんですが、全部デジタル化してしまうと、もう来なくていいっていうふうになってしまうと思うんですね。ですので、やはり持っているものを生かす方向でやっていただくのが一番いいんじゃないかなと思っています。

あと、建物に関しては少しデッドスペースが多いよなというのが多分、スタッフの方が少なくて回ってないんだろなみたいな、ここもっと利用できる場所があるんだって、あのポスターがずっと貼ってあるとかそういうところありますね。そういうところはもっと使えると思うので、何かどんどん使える場所があると思うのと、常設展示はちょっとやっぱりバリアフリーの観点から、ちょっと暗いんですね。うちは小さい子供がいて、見たときに怖いって言って入れなくて、善光寺のところとか、縄文のところすらちょっと怖いみたいな感じだったので、ちょっとお年を召された方とかには不便と怖さがあるんじゃないかなというのを拝見して思いました。

すごく多くなっちゃって申し訳ないんですけど、私は関東から引っ越してきたっていう状況もあるんですけど、長野県はすごく観光客が海外から来るのに、多言語対応が全然ないんですよ。私は長野市在住ですが、こんなに外国人が来るのに、全然英語

がないっていうのがすごく問題だと思っていて、それをスタッフがやろうとするとすごく大変になってくるので、展示に英語をつけちゃえば理解できるので、海外の方ですぐ足を伸ばせば博物館とか来ると思うんですね。

そういった対応ちょっと残念かなと思っていて、多言語化をやっぴりお金かかるのでたくさんすると大変なんですけど、ベーシックなところはした方が長野から少し近いのでやっぱり長野、ターミナルとして海外の方、すごく多いので、そういった人も巻き込む、県民だけじゃなくて、外からの人を巻き込む仕組み作りがあってもいいんじゃないかなと少し拝見していて思いました。以上です。

(水澤総合情報課長)

海外からの来館者はこのところ1週間に3日ぐらいは来ていました。今回それもあまりまして安曇野展につきましてはキャプションとアンケートと目録の英語バージョンを当館の英語に堪能なスタッフが作っているんですが、常設展示は確かにおっしゃる通り、まだまだまだ足りていませんので、その辺は今後は考えていきたいと思えます。多言語表記等については、タブレットによって多言語で解説ができるような方法も含め改善を目指していきたいと思えます。

(矢島議長)

時間がだいぶ押してきてきましたので、次のテーマにまいります。
事務局からお願いします。

(新津副館長)

(資料6について説明)

(矢島議長)

災害について、今ご説明あったんですけど、何かございますか。

(植田委員)

ソフト面とハード面の2点を申し上げたいと思います。

先ほど新津副館長のご説明の中で、ここが博物館なので人命救助というようなことがあるということで、私も今回この資料を事前に見ていて、例えばホールの方で何かあったときに備えて、例えば避難訓練とか、そういったものを、例えば古文書愛好会の皆さんにご参加いただいたときにちょっと一緒にご協力をいただくといったようなソフトの、館内の方はそれほどいらっしゃらないから、逆に取り残された人がいないかっていう避難訓練などをされると、連絡体制を年1回、2回されると良いのかな

と思います。

例えば文化財保護とかそういった費用をうまく活用してですねっていうのが一点。それからハード面では、最近のゲリラ豪雨のようなものすごい雨で、従来からは考えられないぐらいの下水管が対応できないような状況。つまりここで一番心配なのが内水氾濫。1階に収蔵庫がありますので注意し、仮に水に浸かったりして、紙資料なら何とか干してという手があるけれども、ビデオテープとか音声の昔の芸能などが保存されているビデオテープ、音声テープなどはもうカビて終わりですから、そういったところで内水氾濫にいかにも、デジタル化は将来の話としても、目の前っていうと、そういったところをちょっと検討していただければということ。これリニューアルの話にも、内水氾濫とかは絡んでくるのでちょっとご検討いただければ。

関連で、すいません2点っていったところのソフトに近いんですが、歴史館が被災しなかったとき、だけど応援を出さなきゃいけない、もしくは応援の事務局となったときに、館は通常運転をするけれども、学芸員の先生方は通常運転もしくは来年の準備をしつつ被災地に応援を行かなきゃいけないっていうような、もう各地で今みんな疲弊してますよね。

そういったところの何か仕組み、どうすればって答えはないんですが、そういったところの観点も、人を大事にするといい続けているので、そういったところも申し述べさせていただきました。よろしく願いいたします。

(新津副館長)

1点目の避難訓練については、一応今のところ、年に1回、それから課ごとに避難経路の確認などは行ってますけれども、お客さんも含めたところでは最近では行ってないので、その点はまた考えていきたいと思っております。

それから水害への備えなんですけれども、今、古いビデオテープとかそういったのは、DVD化、デジタル化してるので、そういったところを例えば、デジタルアーカイブの中に組み込んでいくとか、そういったところで何とか避難するとかいうこともありますし、本当に想定外の水害が起きた場合には、やっぱり1階にありますので、それとも2階のホームとかそういったときには、やっぱりその順位があると思いますので、そういったところはしっかりとこれから考えていかなきゃいけないところかなと思っております。

(小松館長)

今、内水氾濫が起きたときの対応ということで御指摘をいただきましたけれども、私どもそういった観点では考えていなかった部分もあるのかもしれないので、ご指摘いただいたリスクがあるとすればどういうふうにしていくのかということは今後考えていきたいなと思います。

歴史館が被災しなかった場合に他を支援すると場合に、おっしゃるように人的に非常に限られている中で、どこで起きてもそうなんですけれども、そこへ支援のための人を送るとするのは、うちに限らずかなり大変な部分があるんだと思います。

ですので、そういったときにどういうふうにやっていくのかっていうようなところは、当館としても対応できるところはやっていきますし、県全体としてどうするかのところについては、文化振興課等とも相談しながらということに現実的にはなると思っています。厳しい課題だと思っておりますけれども検討していかなきやいけないなと思っております。大事なご指摘ありがとうございます。

(矢島議長)

予定の時間が迫っておりますので、まだ発言されていない方、何か一言ずつお願いしたいと思います。

(浮貝委員)

専門的なことはわからなくて大変申し訳ないんですけども、先生方がおっしゃっていたように、体験型がやはりもっとあると特に子供たちはすごく思い出に残って、また来たいなっていうふうに思うので、以前もお伝えしたかもしれないんですけど、以前はその常設展の最後に、その昔、当時、子供たちが遊んでいたおもちゃを使って遊べるっていう体験コーナーがあったんですけど、そういうのをまた復活していただけると、より子供たちが親しみやすいかなと思いました。

あと、先ほどロビーのスペースが有効活用できるんじゃないかっていう話があったんですけど、このすごい猛暑、酷暑の中で、やはり子育て世代の皆さんは外で遊べないので、プールに行くのも暑すぎてとか、やはり室内を求めると家族が多いと思うので、そうなったときにクールシェアスポットとして、歴史館がすごくいい場所なんじゃないかなというふうに個人的には思うので、そういうところも広く子育て世代に周知していただけるといいんじゃないかなと、幅広い世代に来ていただけるきっかけになるんじゃないかなと思います。以上です。ありがとうございました。

(中澤委員)

本日初めて参加させていただきました。ありがとうございました。

事前に資料をお送りいただいて目を通させていただいたんですが、いろいろご意見など申し上げるほど知識もなく、最初に笹本特別館長さんが県民の皆さんに必要とされる施設ということをおっしゃっていたのが、とても心に残りまして、私も先ほど申し上げたように市民交流センターの運営させていただいているんですけども、やはり市民の皆さんにどういったふうになれば必要とされる施設になるのかというのは、

もうずっと考えてやってまいりましたが、なかなかみんな価値観も違うし、みんな興味も違うしという中で、全ての人に興味を持ってもらうというのは大変難しいことだと思うんですね。そういったお話とか、今日皆さんのいろんなお考えも聞きまして、ちょっと私の方も非常にいろんなことを勉強させていただいた2時間でした。どうもありがとうございました。

(若林委員)

面々たる素晴らしい方がここに選ばれてきている中、私も一応教育委員ということで、お勉強しておいでということで来させていただきありがとうございます。

私は上山田在住なんですが、そもそもこの県立の歴史館がここにあるっていうこと自体が、とても名誉であるにも関わらず、皆さん全く身近に感じていないっていう現実を私はしみじみ感じております。

そもそも、本当に立派な建物であるにも関わらず、千曲市にそんなのある？将軍塚は来るよ。イチゴ狩り来るよ。情報館のところで何とか教室があったよ。公園で遊ぶよ。と諸々あっても、歴史館てどこ？何そんな立派なのどこにある？っていうのが現実でありまして、私もこの当て役をいただくに当たりまして、先日のお祭りのときにもちょっと雑談がてらその話をさせていただいたら、あれは小学校のときとか学校で連れてっていつてくれる場所だけであって、家族で行くところじゃないよね、なんて言うてね。

私も上山田にいながら生まれは長野市なんですが学校で来たかしらとかっていうような思いで、やはりイベントがあったので、ついでにちょっと見学しましたっていう類の経験しかしておりませんので、改めまして、もったいないなっていうのが実感いたしました。

ちょっとこの機会にね、この協議会でお世話になるので、またアンテナを高くしながら、この2年お世話になろうと思います。生意気なこと言って申し訳ございません。ありがとうございました。

(小松館長)

ありがとうございます。大変に厳しいご指摘もいただいたと思っておりますけれども、今回は、県民の皆さんに親しんでいただける歴史館を目指してというテーマでお話を聞かせていただきました。

当館も歴史博物館ということなので、テーマ的に難しい部分もあるんですけれども、もっと地元の皆さんに親しんでいただいたり足を向けていただけるようにするにはどうすればいいのかということ、引き続き知恵を絞って考えていきたいと思っております。今後もいろいろアドバイスもいただきたいと思っております。どうもありがとうございます。

(矢島議長)

それでは全員発言したということで、時間ちょっとオーバーしてしまいましたけど、以上ということで事務局の方へお返しします。

(小松館長)

矢島会長さんにおかれましては議長として円滑に議事を進行いただきましてありがとうございました。

また、委員の皆様にはですね、多くの貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございました。

会議事項その他になりますけれども、委員の皆様には今後また当館へ様々なご助言いただくために、本日からお使いいただける年間パスポートということで、お手元にご用意させていただきました。

またお時間がある時にまたおいでいただいて、それを踏まえてまたご意見等をお聞かせいただくとありがたいと思います。

それからまたなかなか限られた時間でございますので、もしかすると他にもご意見多々あるかと思えますけれどももしご発言いただけなかった部分があればですね、

お手元の方に紙の方もご用意させていただきましたので、そちらの方にメモをいただいて、本日置いていていただいても結構ですし、また後日お送りいただいても結構でございますけれども、もし言い足りないと思う部分ございましたら、ご意見いただければと思います。

それでは以上をもちまして本日の協議会を閉じさせていただきたいと思いますが、最後に特別館長から一言ご挨拶をさせていただきたいと思います。

(笹本特別館長)

皆さんいろいろご意見ありがとうございました。

私どもとしては、この会は私達にとっての最大の指導会であり、最大の武器であり、最大の応援団だと思っております。

私はいろいろなところで協議会等の委員もやっていますけれども、委員をやるっていうことは、ここで発言するだけじゃなくて、日常的にも応援をしていただかないといけない。

こうしたら人が入ってもらえるよという意見を日常的にもぜひ続けていっていただきたいし、周りの人に今やっているのはこんなのですよっていうことを見ていただくためにも、年間パスポートを皆様にお渡ししましたので、できるだけ多く来ていただいて、私たちの活動を見ていただければと思います

私の経験では、ある市の博物館の協議会では、みんな委員が言いたいこと言っていて、その通りやったら国立博物館より大きくなるよと、言ったことがあります。

あなた方はどれだけの税金を出して、どれだけの文化活動をやっているんですかと、年に何度この博物館見ているんですかと発言しました。それ以降、協議会でここはよくトイレを掃除してくれているとか、子供のためにこういうことやってくれていることはありがたいというような、職員が自分たちを鼓舞できるような意見をいっぱいいただけるようになりました。

その意味でこれからもぜひ皆様にご協力いただくとともに、私どもも一歩でも前に進んで、より良い博物館になるように努力していきたいと思えます。

それぞれの意見の全てを実現するというわけにはいきませんが、できるだけ皆様のご希望に添えるようにしていきたいと思えますので、ご指導の程引き続きよろしくお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

(小松館長)

それでは以上をもちまして、令和7年度県立歴史館協議会を終了いたします。
どうもありがとうございました。

【終了】